

チベットの版木とデジタル版画

一九七九年、国立民族学博物館（以下、民博）は一九七〇年代にネパールのドルポ地方で入手された版画と版木を中心とする「チベット仏画コレクション」を購入した。長野泰彦民博名誉教授を代表とする共同研究「チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究」（二〇一五～二〇一八年度）では、コレクションに含まれる護符・版木約千点を対象として、チベット仏教に関連する画像・記述の研究を進めてきた。版木は、紙や布に画像や文字を刷った版画の原本であり、大半は版木と版画がセットで収蔵されていた。しかし、数十点の版木には、版画が付属していなかった。

版木にあらわされた画像や文字は刷ることを想定して彫られており、向きが反転している（図1）。そのため、通常の観察では判読作業が難しく、新たに刷り直すことが検討された。しかし、刷り直すことで新たにインクや墨が付着し収集時の状態から変化が生じてしまうことなどが懸念された。そこで、版木の状態に変化を与えずに、版木に記された画像や文字を判読する方法として、光学的手法を用いたデジタル撮影を行うこととした。

もともとは平らな板である版木の表面には、画像や文字が凹凸であらわされている。言い換えれば、インクや墨として紙・布に刷られる部分は平らな面（凸部）として残され、その周辺が彫りこまれている（凹部）。版木表面につくられた凸凹は光のあて方により陰影が変化し、見えやすさも変わる。今回の撮影では、この光学特性を利用することにした。

通常の光はさまざまな方向に振動しているが、ある方向にスリットの入った光学フィルター（偏光フィルター）を通すと、特定の方向に振動する光（偏光）を取り出すことができる。偏光を資料に照射し、そしてカメラ側に装着した別の偏光フィルターを調整することで、資料表面で反射した光の取り込み方を制御できるようになる。

今回は、版木表面の正反射光成分を最大限取り入れる条件で撮影し、平らな凸部が明るく、彫られた凹部が暗く写るデジタル画像を取得した（図2）。この画像を画像や文字の判読に用いるには、デジタル上での処理が必要と二段階ほど必要である。一つは画像の向きを左右反転させ、画像・文字の向きを整えること、もう一つは明暗を反転させ、画像・文字の部分を黒く、背景を白くあらわすことである。こうして、まるで刷ったかのような「デジタル版画」をつくることができたのである（図3）。

図の版木は、魔よけとなる護符を刷るための原本である。中央の二重円は大部分が凹部として彫りこまれており、版画に刷ると空白となる。この空白部には魔術のための文字や護符を身につける人の名前が書き入れられたという。中央の凹部は光が正反射する平らな面であるため、デジタル版画では黒く写っている。版画には刷られない部分も丁寧に成形されたことなど、デジタル版画を通して版木の付加的な情報を得ることもできる。

（末森薫）



図1 チベットの版木
(国立民族学博物館蔵 標本番号H0079024)



図2 偏光を用いて撮影した版木



図3 画像処理により作成したデジタル版画